

大学のキリスト教教育-14年経過して

浜 辺 達 男

開学時、朝倉学長は「宗教主任にお御堂はお任せします。授業を大切にしてください!」と言われた。学長が礼拝堂をカトリック風に「お御堂」と表わされたことを憶えている。今まで経験したキリスト教主義大学の学長は皆プロテスタントであったので、最初は戸惑いがあったが、その主旨はよく理解できた。『史料室だより』No.52に「大学礼拝のはじまり」と題して書いたので、今回は「授業」に関して記したいと思う。

初年度のキリスト教概論・キリスト教倫理の担当者は川島貞雄と浜辺達男で、人文学部人間科学科92名、社会科学科141名の学生でした。廊下を挟んだ三号館三階3314・3306教室で授業はもたれた。川島が聖書学を、浜辺が神学を意図し、お互いが何を伝えようとしているかをよく承知した上で授業は展開された。通年の授業を前期に川島が担当したクラスを後期には浜辺が、前期に浜辺が担当したクラスを後期には川島が担当する構成でした。この年度の大学礼拝は短期大学と共に、毎日10時35分から10時50分の15分間でした。

次年度に人間科学科118名、社会科学科144名が入学。初年度の受講生の理解力がとても良く、それに応じて授業内容に多少の変更を加えた。この年度から大学は月曜日だけに限定、10時半から11時の30分の礼拝を守り、大学独自の礼拝週報を発行した。

1991年度には学生数が増え気仙三一（フェリス大）に応援を頼んだ。この年礼拝堂が完成し、浜辺担当の概論は礼拝堂で授業が実施された。明るい窓幅広の前板により、ホワイト・ボードの板書が見にくい点を除けば、寺子屋を連想させる教場は好評であった。三年生のために宗教哲学、キリスト教思想史、演習が開講され、担当コマ数が倍増した。

92年度は人間176名、社会274名、計450名、学生総数1280名となった。大教室棟が完成し、キリス

ト教概論、キリスト教倫理とも、大教室で授業が実施されるようになった。この年度末には、卒業生210名が大学キャンパスから巣立っていった。

93年度は人間182名、社会274名。この年度より、キリスト教倫理を「キリスト教と現代」と改称し2年生が受講するようになった。94年度は人間176名社会271名。キリスト教概論担当者は金井美彦（立教大）が気仙三一と交替した。キリスト教と現代は川島、浜辺が担当した。95年度大学が二学部となり、それに伴って、大学礼拝は月曜日から金曜日まで、毎日守られるようになった。11時50分から12時10分までの時間に移行した。短期大学も歩調を合わせ、双方の信者の教員が説教者として講壇に立った。

最後にまとめとして次のことを述べたい。礼拝時間は短時間であっても、「キリスト教概論」と「キリスト教と現代」の二教科が必修科目であれば、学生たちにキリスト教のメッセージを、順序を踏んで時間を掛けて伝えることが充分可能である。この貴重なチャンスを空しくしてはならない。それ故、キリスト教担当者は、「生きた言葉」を探しながら、学生との対話の中で授業を続行する必要がある、と常に自覚しなければならない。年度により、クラスにより、その成果が挙がる時もある、上手く行かない場合もある。しかし、聖書の「種蒔きの喩」同様に、懸命に取り組んだあとは、全てを神にお任せする外に方法はない。このように車の両輪のように、礼拝と講義の二つによって、14年間のキリスト教教育は実施されてきた。入学式、卒業式は、開学以来、礼拝形式を加味している。クリスマス時期には、クリスマス礼拝とコンサートはずっと継続してきた。限られた条件の中で実施されてきたキリスト教教育であったと言わなければならない。だが、これらのキリスト教教育が、受手の学生たちの協力と支持があったことも追加して言いたい。（大学教授・宗教主任）

資料紹介 2 「定期刊行物」

『東洋英和新聞』・『かえで』

酒井 ふみよ



この項では、中学部・高等部校友会（のちの生徒会）の機関紙からクラブ新聞になった『東洋英和新聞』と、クラブ新聞の『かえで』を取り上げたい。

中学部・高等部では1948年に発足した校友会の機関紙として、まず『東洋英和女学院中学部高等部年報』を年度末に発行している。発行者は井上健之助先生であり、校友会の設立経緯や活動報告の他、

学院日誌や随筆もみられ、教師の文章が多いとはいえ、後の新聞の原型を示されたものと考えられる。

1949年から1950年にかけて、校友会新聞委員会が『月報』を5号まで、『東洋英和女学院中学部高等部新聞』6、7号を発行している。7号で論説、各種コラム（囲み記事）、カットが入り、新聞らしい体裁を整えた。なかでも「BON JOUR」（ボンジュール）というコラムは、英和にゆかりのある人物、グループへのインタビュー記事であるが、この時すでに登場し、途切れることはあっても後々までずっと続く人気のコーナーとなっていく。

『東洋英和新聞』 8～123号（1950～1972）

それを引き継ぐ形で東洋英和新聞8号が1950年10月に発行されている。題字も背景に楓の葉をあしらってデザインされ、ブランケット版（日刊新聞の大きさ）8段組になった。4ページないし2ページに、学校行事の報告、校友会各部の反省など機関紙らしい記事のほか、保健室や図書部からのお知らせもある。最初は投稿記事が多く、文芸欄に創作が数多く掲載されている。発行母体は、当初の新聞委員会から、14号より独立した一つのクラブとしての新聞部となった。年間5～7回（51年度は9回）発行はおよそ隔月ということであり、当時の新聞部員の熱意と

力量がうかがわれる。なお10号より多少の広告が入り、「青野」や「木村パン店」「フランセ」が常連で協力して下さっている。45号より15段組となり、48号より「学校拝見」（のちの「他校訪問」）が始まる。

1970年代前半は巻でまきおこっていた学生運動の影響下、英和でも教師と生徒の対立、生徒会会長不在などがみられ、生徒会組織の改編が行なわれた。紙面にも社会への意識が高まっていたことが表われている。そしてクラブ新聞のあり方をめぐって議論があり、発行回数を増やすために体裁を改めることになった模様である。

『かえで』 3～98号（1972～1997）

過渡期は『クラブ新聞』との名称も使われたが、『かえで』3号が1972年12月にA4版タイプ印刷で出発した。「事実を速く正確に知らせること」「英和生のコミュニケーションの場となること」を目指した。最初は単調な紙面構成ではあったが、意見文が多い。次第にコラム欄が復活していくが、広告だけはとっていない。1974年より「90周年特集シリーズ」として始まった英和の歴史をたどる連載記事は2年間11回にわたっている。そして、楓祭関連あるいは生徒会役員紹介に、また主に先生がたの近況を伝える学内トピックスに多くのスペースがさかれ、日常の学園生活がうかがわれる紙面となった。49号（1980年）からタブロイド版10段組が定型で年間発行回数も平均3回となった。速報性が薄れた分生徒会関連記事は減り、内容は身辺雑感的に変わっていった。遂に入部者がいなくなり、1997年3月『かえで』は98号をもって廃刊となった。

欠号は下記のとおり。

『東洋英和新聞』33, 42, 79号

『かえで』8, 32, 36, 37, 48号

（ただし37および57号以降は合本製本したものが中高部図書室に保管されている。）

（中高部教諭・史料室委員）

『東洋英和ニュース』

陶山義雄



『東洋英和ニュース』は1935(昭和10)年12月に創刊号が刊行され、1940年12月に発行された58号をもって閉じられた、月刊誌の学内新聞である。5年間、1936・39・40年の8月を除き、欠かさず発行された。その性格は同時代に出版されていた『校友会誌(楓)』(1930年から1941年まで年一回発行された雑誌)と重なる内容もあるが(文苑、哀悼、生徒の作文)、『楓』が校友会発行の雑誌であるのに対して、『東洋英和ニュース』は概ね学内の教

職員を対象にした英和の機関紙である。創刊号でその意味が榎本友三郎と吉本てふによって4点挙げられている。第一は、勤務員の相互理解を深めること。第二は、東洋英和の教育の資質を高め、これを学外に知らしめること。第三は建学の精神が益々徹底されること。第四は、人格教育と基督教主義精神をもって徳育を図ること、等である。

このような趣旨にそって、A4版・8ページから成るこの機関紙は毎号ほぼ同様の内容割付がなされている。第一面は校長、教頭、役職の教員による時節や学校・宗教行事に適ったメッセージ、第二面は外来講師を含めた礼拝説教、聖書講話、入学・卒業式辞、第三面は主として教員の研究発表や随想、旅行記が載せられている。第四面は幼稚園(だより)、第五面は小学科、第六面は高女科、師範科に充てられ、活動報告や生徒・学生の作文などが掲載されている。第七面は学校日誌、行事予定、校友会報告、日曜学校報告に充てられ、夏期休暇中の先生方の滞在先なども記されている。第八面は広告である。なお48号(1940年1月)より、物資の欠乏により、紙面が4ページに減らされているが、上記の項目は極力盛り込まれている。

『東洋英和ニュース』の刊行された5年間は、日本が日中戦争から太平洋戦争直前に至る、激動の時代であった。東洋英和もこうした情勢に巻き込まれていく有様が58号まで読んでいく中で鮮やかに蘇ってくる。当初掲げられた主旨のうち、基督教主義による教育が、次第に八紘一

宇を目指す滅私奉公に摩り替えられて行く姿が26号(1938年2月)を境に露骨に現れていく。折しも、第一面または第二面で殆んど執筆、もしくは語ってこられた、ミス・ハミルトンが辞任して、小野直一が校長となり、紀元節では「建国の精神」が式辞として(26号)、入学式では式辞ではなく訓話に改められて「日本精神とキリスト教」が第一面を占めるようになる(28号)。こうした暗雲をひと時、追い返すようにハミルトン先生送別記念行事が二面から七面までを占めているのは英和にとって救いである(27号)。だが、コーテスが去り(41号)、終刊号となった58号では、ヘニガーご夫婦、キニー、レーマンの送別会が報せられている。時局の厳しい中でも、野尻湖夏季学校や、修養会、修学旅行が実施され、生徒の明るい報告や感想文が20号より随時掲載せられている。追悼記念日礼拝の召天者一覧が、その年の10月号に載り(34号を除く)、1939年の45号では戦没勇士として在校生のお父様2名、お兄様1名が17名(内5名が在校生)と共に追悼に加わっている。

42号(1939年6月)には、学内で集団赤痢が発生して、46名が入院(うち教職員8名)、その他保菌者10名が自宅静養、2名の小学生が亡くなると云う悲惨な事件が報せられ、その余波は翌月の『東洋英和ニュース』にも及んでいる。

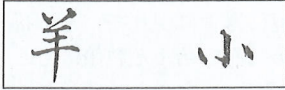
時局の厳しさは先生方の夏休みも無くなり、学校農場(小平村)での開墾と食料確保に生徒(延べ929名)と共に励んでいる様子が報告されている(44・54・55号)。1939,40年の7月号(43・54号)では先生方の休暇中の住所の記載が無いが、もはや不要な事態を暗示している。

1940年をもって已むなく閉じられた『東洋英和ニュース』は日本が更に突き進んでいった悲劇に対して無言の抗議をなしている。終刊号に載せられているミス・キニーの「美しい島(日本)」と、ミス・レーマンの「美しき歌」では、何時の日かその美しさが戻り、東洋英和にも再度、建学の精神に立った学院形成を、両宣教師が祈っておられるように読み取れる。

なお『東洋英和ニュース』は全号揃っている。
(大学教授・史料室委員)

『小羊』

東 夏子・叶田光恵



『小羊』は小学部の児童の書いた作文の中から、よりその子らしさが

出ているものを選び、まとめたものである。この『小羊』の創刊当初および、その歴史を振り返ってみよう。

元小学部教頭、倉本和先生は、次のような原稿を送ってくださった。

「小学部の史料室の先生のお尋ねがあったが、何もお応えできないことに気がついて多くの先生方にお聞きする次第になった。先ず手近に小学部退職者の中から図書担当者、小羊編集に関係の深い先生方に伺ってみたけれど、当時のことを何らかの形で知る人は、誰もいなかった。

しかし、その中からアドバイスを下さる方があって中高部の図書室の先生、卒業生、特に虹の会の出席者にも伺って、あの方なら何かご存知かもしれないというお名前が上がってきた。又、ありがたい事に初期の小羊・名簿・女学校の絵はがきを送って下さった卒業生がある。その中に主事の榎村先生が子ども達の事を『小羊』と呼んでいらしたことが記されている。この辺りに創刊に至るお考えが集約されているように思えてならない。」

1934年、創立50周年記念に『小羊』1号が発刊されている。『小羊』誕生の動機の詳細はわからないが、子どもたちの作文や作品等を、何かしらまとめてそれを今後の教育活動に生かしていけるようにとの思いがあったと思われる。とびらには、「小羊の誕生 小羊が生まれました やさしい神の小羊が 私達のお友達 皆で仲よく遊びませう」と書かれている。きれいに印刷・製本され、習字、図画工作の作品も写真で載せられている。その他、学芸会・運動会の写真、学校日誌、夏期学校日誌、母の会記録、父母の原稿などがある。

5号で、荒木渥子先生が「綴方に対する私見」と題し次のように述べている。「静かに物を凝視する。粘り強く考える。この態度が出来て初めて個性のある文が書けるので、この習慣の養成には大いに力をつくしたいと思っている。」この頃の綴方教育に対する先生方の思いが伝わってくる一文である。8号からは戦争の色も濃く、「英和」も「永和」と記され、兵隊さんからの

手紙なども目につく。そして、毎年発行されていた小羊も戦争のためにとだえてしまい、戦後1951年に初めて出された10号は、B5版でガリ版印刷である。児童の作品は作文のみになってしまったが、学校行事や母の会報告などは戦前と同じように編集されている。1955年の14号は、創立70周年、新校舍落成記念の時のもので、内容も少しずつふくらみ、いろいろな方からの寄稿、ご家庭の方の文章、クラブ活動報告、修学旅行などのプログラムなどが掲載されている。また、6年生全員の「卒業の言葉」も載せられていて、作文とともに年間の学校の歩みも収録されていた。1963年の22号より、手書きから印刷に変わっている。児童作品・各種行事・児童の活動およびそれについての感想なども載せられている。1967年の26号から編集担当が編集委員から国語部になり、『小羊』の意図として「児童の国語教育・作文教育を中心とした学習の年間成果を全校的規模で集大成し、それを教育面で生かしていく」とある。従って、年間の歩み、要覧的なものよりも、国語教育、作文教育を中心とした『小羊』として編集されるようになっていった。1985年の44号、創立100周年記念号より、初めて全員の作文が載せられるようになり、61号の今に至っている。

こうして順を追って見ていくと、時代の流れと共に、『小羊』は様々な形に姿を変えてきたことがわかる。また、その時々先生方の、子どもたちと小学部への深い思いと愛情が伝わってくる。作文を書くということは、自分の中と外をじっくりと見つめ直し、深く考え、認識を深めていくことである。そのことによって子どもたちは成長していく。その1年間の成長を、時代と共に『小羊』というかたちで残し、振り返ることができるのは、子どもたちにとっても、私たちにとっても、幸せなことである。戦争をはさみながらも、継続し続けた多くの先生方のご苦勞、ご努力とを、今いる私たちが忘れずに、これからの時代にしっかりとつなげていかなければならない。

最後にこれをまとめるにあたり、倉本先生をはじめ、お力添えをいただいた多くの旧教職員の方々と卒業生の方々に感謝を捧げたい。

なお、『小羊』は全号揃っている。

(小学部教諭・史料室委員)

『東 光』

谷 川 祐 子

東
光

『東洋英和女学校同窓会報告』及び『東洋英和女学校同窓会会報』は、1896（明治29）年から刊行された同窓会の会報であるが、戦時下の1940年を最後に途絶えてしまった。1942年頃から同窓会を「東光会」と称するようになり、1954年の創立70周年を記念して、

『東光会々報』（B 5 版・16ページ）が刊行された。これをもって、同窓会会報は復活した。後記に「久しく杜絶えて居りました会報を復活し、七十周年記念号として皆様の許にお送り致します。」とあり復刊できた喜びがひしと感じられる。翌1955年、同窓生で学院の教諭でもあった岡本幸江先生を編集発行人として、『東光』創刊号が刊行された。タブロイド版で4ページないし6ページのもので、大判だったので東光会新聞と呼ばれていたようである。活動報告、随筆、会員消息、学院の近況等が記されており、内容は戦前の同窓会会報と大差はないが、3号より卒業生の進学先一覧が新たに設けられ、時代の変化を感じさせる。この形式は5号まで続いたが、現在史料室にも東光会にも4号は保管されていないことは残念である。

1961年、東光会役員岩崎昌子氏の企画により、『東光』は体裁が一新され、改号No. 1となった。その形式は現在まで続いている。1964年、創立80周年にはA 5 版・98ページの小冊子、1974年、創立90周年にはB 5 版・32ページの小冊子が記年号として刊行された。先生方、卒業生の随筆、支部便り、座談会等が掲載されている。1984年の創立100周年記年号（A 5 版・238ページ）では、1906（明治39）年から1983（昭和58）年の卒業生の随筆を各学年毎に掲載している。「受けつがれる英和のこころ」と題して、生徒の心の中に映じた100年の学院の軌跡をたどることにより、世代を超えて受け継がれ、今後も正しく伝えられていくべき「英和精神」とは何かを問うている。巻末には「東光会年譜」が付され、東光会の歴史を知る上で、大変参考

になるものである。

1986年に短期大学が横浜に移転したこともあり、1988年に同窓会の組織の変更があった。全体の組織を「東洋英和女学院同窓会」、高等女学校卒業生と高等部卒業生を含む高等部同窓会を「東光会」とし、それぞれの会報を『東洋英和女学院同窓会だより』、『東光』と名付けた。『東光』は名称と号数をそのまま引き継いだため、『東光』24号までは発行が東洋英和女学院東光会で、25号以降は東洋英和女学院高等部同窓会東光会である。31号より特集が設けられ、「Dr. Vories」「社会に貢献する会員たち」「教会に奉仕する会員たち」「生涯学習」「医療に携わる会員」など興味深いテーマに沿って、会員の声を載せている。2002年現在で39号を数えている。史料室には1961年からの『東光』は全て揃っている。

これとは別に、短期大学の同窓会では独自に同窓会の会報が出されていた。英文科同窓会かえで会では1962年に『Kaede』を創刊している。2002年には42号が刊行されている。24号～26号が標題を『かえで』としているがだいたい同じ形で出されている。保育科同窓会保育部会では1966年に『はぐくみ』を創刊している。2002年には35号を数えている。同様に国際教養科同窓会楓雅会は『FUGA』を1989年より発行している。

なお、大学の同窓会楓美会は『楓美』を、大学院の同窓会は『同窓会だより』をそれぞれ発行している。

このように学院の発展とともに、同窓会組織も新しくなり同窓会関係の会報も現在7種類が発行されるに至った。『同窓会会報』に続き、戦後発行された『東光』が今ある諸会報の基盤であり、東洋英和の卒業生を結び付けてきた意義は大きい。『東光』で語り継がれてきた英和の精神がこれからも正しく伝えられていくことを願ってやまない。

欠号 タブロイド版『東光』4号（1959年）
（中高部講師・史料室囑託）

短期大学の牧者であった伊藤之雄先生

伊 勢 紀美子

ある先生が伊藤先生に「確かに、先生が迷い出た1匹の羊を救い出すために谷底まで降りて行かれる姿はほんとうにすばらしいと思います。しかし、先生は短大の宗教主任ですから、残った99匹の羊の面倒も見なくてはいけないのではないのでしょうか。」と言った。伊藤先生の日常生活を知っている者は思わず頷いてしまった。

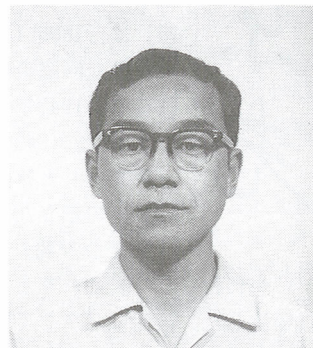
しかし、先生は全学生がひとりひとり愛しい小さな者であり、迷い出た一匹の羊であってほしかったに違いない。先生の言動は常に魂を目覚めさせるもので、反射的に先生の研究室に足を運ばせるものであった。その研究室には、また、いつでも人を受け入れる環境が整っていた。まず、伊藤先生がいらっしゃった。そして、音楽があり、コーヒーがあり、仲間の学生達がいて、おしゃべりができて、さらに、先生のために、友のために、そして自分のために何か素直にできる奉仕の場があった。学生ひとりひとりが自分の存在を確認できる場がそこにあったのだ。

伊藤先生が着任されたのは1970年4月であった。これに先立って、3月の卒業礼拝には説教者として招かれた。しかし、その説教は先生の口から伺うことができなかった。学園紛争のリーダー達が「東洋英和」の宗教教育ならびに教育そのものの形式化を批判し、形式的な礼拝の無意味さを訴え、力づくで阻止しようとした。リーダー達の訴え、先生達の説得、参集したほぼ全員の学生達の「礼拝を守りたい」と叫ぶ声の中、壇上の先生が急に壇から降り、礼拝堂から走り去られた。結局、卒業礼拝は行われず、先生の準備された説教はプリントされ、翌日、配布された。後でなぜ先生は走り去ったのかと伺ったら、「喉が渴いたので、水を飲みに行ったのだ」との返事であった。

就任された先生は短期大学の改革の先頭に立たねばならなかった。歯に衣着せぬ本質論から迫る先生の発言はトライ&エラーを許容しながら、いきいきとした緊張のある教育活動を追求し、教職員に自由意志による教育の実践を促すものであった。

先生は宗教教育の方法を変え、従来の修養会、

リトリートと呼ばれるものをカンファレンスとし、隣人との出会いと対話を通してキリストを知り、キリストと、出会うということを目指した。さらに、自分の担当するキ



リスト教関係のカリキュラムを文字どおり毎年のように新しくし、科目内容を改め、名称を変更した。当時は教員も若く皆張り切っていたので学科カリキュラムもよく改定されたが、伊藤先生の担当科目の変わり様は、その比ではなかった。

先生の発病は就任後そう遅いことではなかった。また、復帰から再発入院の間でも、皆が心配するほど遅くまで学校に止まって仕事をしていらした。私と先生は夜9時近くまで居残る常習犯だった。互いに安否を気遣い、帰り際に研究室を訪ね、一緒に学校を出たものだった。ときに六本木で道草し、コーヒーを飲み、ラーメンを食べながら話を聞いてくださった。1980年1月23日、先生は脳腫瘍のため召天された。横浜移転、四大への吸収合併、21世紀を迎えて、教育の本質論を論じた日々を、短期大学の牧者であった伊藤先生とともに惜しんでいる。

(大学教授)

伊藤之雄先生略歴

1924年	文京区本郷に生まれる
1950年	東京大学文学部倫理学科卒業
1953年	日本基督教団 岩見沢教会牧師 (1960年まで)
1960年	日本基督教団 西片町教会牧師 (1962年まで)
1964年	ニューヨーク ユニオン神学校修了 (神学修士)
1964年	パリ大学・テュービンゲン大学留学
1966年	山谷の隅田川伝道所で伝道
1970年	東洋英和女学院短期大学助教授就任 (71年教授)
1980年1月23日	脳腫瘍のため逝去

※訂正とお詫び

No.58ミス・ハミルトン略歴中1988年誕生を1888年に訂正して、お詫び申し上げます。